◎2 月　野木京子

太陽と
いう球体へ駆けだして
しばいぬの子のしっぽころるん　　さいう（愛知県）

＊柴犬のしっぽが丸くなっているのを、「しっぽころるん」と名付ける感性に脱帽。うまいなあ。太陽を「球体」と表現して、「しっぽころるん」の丸みへとイメージを巧みにつなげてもいる。

さみしさに Sammy と名前を
つけたから
それから十年来の親友　　まちりこ（埼玉県）

＊淋しさ、悲しさ、悔しさなどの感情は、自分でコントロールできないことが多い。でも、感情や不安に名前をつけることで、手なずけることができる。自分の心から外に出すことができるから。

灰の中から
お星さまのかたちの
ちいさな骨を拾いあげ
死が私の脊椎になった朝　　春町　美月（大阪府）

＊骨を拾いあげること、亡くなった存在を忘れないこと。それらを「私の脊椎になった」と表現した見事さ。それも「朝」という一日の始まりの時間で、詩のなかに陽光の明るさも感じた。

二月ってうさぎのように
逃げていき
三月がマーチ奏でて
やってくる　　加藤 美紀（愛知県）

＊二月はほかの月よりたった二、三日短いだけなのに、なんだかすごく損した気分になる。だけどそのあと、花の季節が音楽を奏でながらやってくる。なるほど、と感心した。

春眠を獏の背中に乗ってゆく　　五味　はこ（神奈川県）

＊獏は幻獣で、悪夢を食べてくれる。春の夜、獏に乗って運ばれたら、心穏やかな夜を過ごせそうだ。現実と幻との境目のような時間を感じる。

就職情報誌を開いて来世の仕事を
探しほくそ笑んでいる午後　　小林紅石（埼玉県）

＊こういう時間の過ごし方は楽しい。無益かもしれないけれど、あれこれ想像できるから。緊張に満ちた日々のなかで、この詩を読んでほっと一息つけた。

国道拡幅工事の用地に
なにもしらないたんぽぽが咲く　　最上葉途（山口県）

＊いずれショベルカーでタンポポは潰されてしまう。そんな恐ろしい未来とは関係なく、命あるかぎり咲き続ける花。

空から降る雨を
地面の染みで気がつくように
死は僕らに近づく　　髙橋ちひろ（宮城県）

＊死は、いつでも突然やって来る。人間にはコントロールできず、ふいに空から降ってくるのだ。死を「地面の染み」と目に見えるもので表現して優れている。

決して広くない
部屋の中
トトトト　トトトト
近づく足音は
小さな幸せの音　　絢子（東京都）

＊よちよち歩きの赤ちゃんの歩みだろうか。それともペットが走り寄る音か。「幸せ」を、音という具体的なもので表して、印象的だ。

結婚は人生の墓場ではなかった　　ビスコ（愛知県）

＊思わずほほえんでしまう。ボードレール「悪の華」に出てくる言葉だが、ボードレールが意図した意味とは違って誤訳されたらしい。ささやかな幸せを心から大切にする気持ちが、素直に伝わる。